

授業実践

トンカツ理論

— アタッチメントとは素材に合わせてつける卵や小麦粉のようなもの —

七木田 方 美

はじめに

江田島でランチにカキフライを注文しました。お皿に並んだカキの大きさにびっくりし、一口はおぼり、噛んだときのサクリもっちりとは極上で、称えるように箸に残るカキを見つめました。カキには衣が密着していて、少しも剥がれずにいることには驚きました。カキフライを作るはずが途中でピカタになってしまう私にとっては、興味津々でした。

カキもタコも海のをフライにするときは、下準備の丁寧さがあってこそ。海のものでなくとも家庭料理でメジャーなトンカツも、出来上がってしまえば見た目には分からない素材の下準備と卵と小麦粉を混ぜ合わせたバター液あってこそ、パン粉をきれいにまといます。そして適温の油にくぐらせれば、素材の持ち味を活かしたサクサクのフライに変身です。

本稿では、乳児保育Ⅰの授業で学生と考えた「アタッチメントとは、フライやトンカツの卵や小麦粉（バター液）のようなものである」という、「トンカツ理論」を紹介します。

保育におけるアタッチメント

アタッチメント形成は、ヒトにとって乳幼児期に最も重要とされるものです。

平成20年度（2008）に施行された保育所保育指針では、アタッチメント形成の重要性を、第2章の冒頭で「特に大切なのは、ヒトとの関わりであり、愛情豊かで 思慮深い大人による保護や世話などを通して、大人と子どもとの相互の関わりが十分に行われることが重要である」と述べており、この部分以外にもいくつかの個

所で「特定の大人との応答的なかわり」の重要性が指摘されていました¹⁾。

そして平成30年3月（2018年）の改訂版では、保育所保育において「養護と教育の一体性」が強調されました。乳幼児期の子どもが、健康や安全の保障、快適な環境という生活の場と、子どもが一人の主体として尊重され信頼できる身近な他者の存在によって情緒的な安定が図られることが必要であるとし、保育士の役割として、「子どもの欲求、思いや願いを敏感に察知し、その時々状況や経緯を捉えながら、時にはあるがままを温かく受け止め、共感し、または励ますなど、子どもと受容的・応答的に関わることで、子どもは安心感や信頼感を得ていく。そして保育士との信頼関係を拠りどころにしながら、周囲の環境に対する興味や関心を高め、その活動を広げていく」と解説しています²⁾。

乳幼児期の特定の大人（多くは母親）との生理的なつながりを基盤に形成されるアタッチメント形成は重要で、メカニズムとして母親の代わりになるものを見つけることは困難です。しかし、子どもの月齢が高くなるほどに、保育所保育においてその月齢に必要とされるアタッチメントを形成することは、保育所保育において重要だと強調されたのです。

人は素因を基盤に環境との相互作用で成長する

授業では、アタッチメントの重要性を、子どもは素因（気質と体質）を基盤に環境との相互作用で成長することを図1を用いて説明しました^{3, 4)}。

誕生時、子どもは生きぬくために欠かせない

子どもは素因を基盤に環境との相互作用で成長する

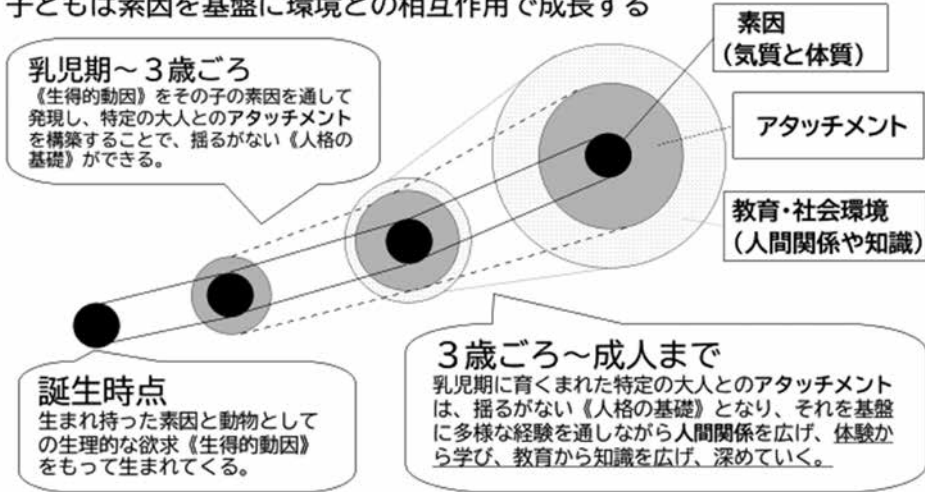


図1. アタッチメントの役割

「性格の成り立ち」 富田和巳：小児心身医学の臨床、診断と治療社、2003⁴⁾を参考に作成

栄養や睡眠や排せつなどの《生得的動因》を持って生まれてきます。乳幼児期の《生得的動因》の発現の仕方は、その子どもの素因を通して発現するため多様です。お腹に排泄物が少し溜まっただけで不快で不機嫌に泣く子どももいれば、排せつしてからようやく不快を知らせる子どももいます。眠るとき、抱かれていればスーッと寝てしまう子どももいれば、ひと泣きしないと眠れないなど多様です。この素因は一生涯、大きく変わることはありません。

アタッチメントは、乳児期から3歳ごろにかけて、その子どもの素因に合わせて、大人が関わることによって構築されていきます。子どもが安心感や信頼感を得て、周囲の環境に対する興味や関心を高め、行動を起こそうとするための土台となります。このアタッチメントは、3歳以降も適切なかわりのもとに、構築され続けます。

言葉を話せるようになる3歳以降は、それまでに育まれた特定の大人とのアタッチメントが揺るがない《人格の基礎》となり、それを基盤に多様な経験を通して人間関係を広げ、体験から学び、教育から知識を広げ、深めていきます。この営みは一生涯続きます。

これらの説明は、図にすることで、なんとなく理解はできます。しかし、アタッチメントをもっとわかるには、身近なものに喩えるとさらにイメージしやすくなります。

アタッチメントとはバター液のようなもの

保育を志す学生らと、この図をわかりやすく喩えられないかと考えました。最初は「雪だるまをつくるように」にはじまり、「イチゴ大福」とおいしいものになり、最終的にたどり着いた比喩は「トンカツのように」でした(図2)。

トンカツの中心部分の豚肉は、厚さ、硬さ、赤身の具合、脂身の量、霜の降り具合、水分量など、一枚一枚異なりますが、途中でカキになったり牛になったりすることはありません。これが生まれ持った素因です。

トンカツにするための大切な行程があります。豚肉の余分な水分をとるために、拭きとったり小麦粉を軽くまぶしたりし、次に卵や小麦粉をほどよい割合で溶いたバター液をまとわせます。このバター液を丁寧にまとわせることで、パン粉が付きやすくなります。この卵や小麦をまとわせることが、アタッチメント形成です。

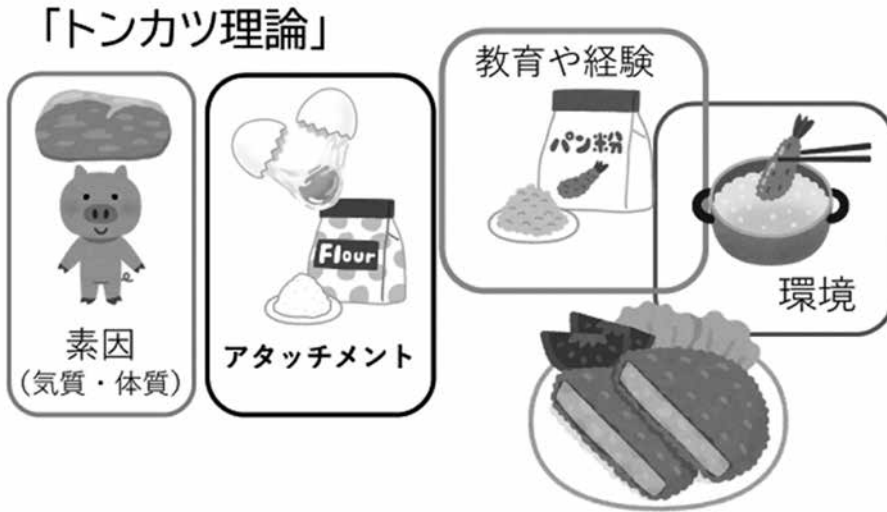


図2. 「トンカツ理論」
アタッチメントとは、トンカツの卵や小麦で作る バッター液のようなもの

トンカツの衣は、パン粉が主張しています。パン粉をしっかりとまとわせることで、トンカツらしくなります。パン粉は、教育や様々な経験です。

そして適切な質と量の油を適温にしたものにくぐらせることで、トンカツが仕上がります。油は社会環境です。

アタッチメント部分の薄くまぶした小麦粉や卵や小麦粉を溶いたバター液は、トンカツになったときには味として主張したり、目には見えたりしませんが、欠かすことのできないとても重要な部分です。これがアタッチメントの比喩としての「トンカツ理論」です (図2)。

トンカツ理論を聞いた学生のコメント

この「トンカツ理論」を用い、アタッチメントとはトンカツをつくる時の卵や小麦粉のようなものと聞いた学生は、自分を重ねて理解を深めました。学生のコメントの一部を紹介します。

「愛情を注がれ育む 自己肯定」

子どもは生まれ持った素因を持って生まれてくるが、これは一人一人が違うものを持ってい

る。その素因に合わせて保護者や周りの大人は愛着関係を構築することで、人格の基礎ができる。この愛着関係によって得た人格の基礎を基盤に、多くの人と関わったり、様々なことを経験したりして知識を広げ深めていく。「とんかつ理論」とは、子どもが持っている素因を豚肉に喩え、人格の基礎を構成するために必要な愛着関係(アタッチメント)を豚肉の周りを囲む小麦粉と卵に、そして出来上がった人格の基礎を基盤とした人との関わり(教育や経験)をパン粉として例えたものでした。どれか一つが欠けてしまってもいけないし、それぞれが大事な役割を果たしていると思いました。私自身、母や祖母など周りの大人からたくさんの愛情を注がれ、たくさん褒められたことで自己肯定感をもち、自分のことが好きになりました。それがあったからこそ、人のことを好きになれたり、色々なことに興味を持ったりすることができたのだと思います。

「丁寧に衣をまぶす 父と母」

自身の素因(豚肉)は持って生まれたものなので変わらない。けれども、自分でも思うが、私は平均と比べて「癖のある豚肉」なので、「バッ

ター液 (アタッチメント:特定の大人との交流。親が注ぐ愛情)」をつけることに苦労したかもしれない。人見知りも激しかったし、衣 (教育や経験) を身につけるのも苦手だった。しかし、父母は私を「おいしいトンカツ (立派な人間、やさしい人間、真人間)」にすることを諦めず、癖のある肉に合うようにバター液を作ってまどわせてくれたし、パン粉 (教育や経験) も彼らが選択できる中で最上のものを選んでくれたと思う。おかげで、今に至るまで、道に外れることなく「おいしいトンカツ」のままである。このことから、人は、最初からトンカツ (人間) として生まれてくるのではなく、「バター液 (親、親の愛など)」と「パン粉 (教育や経験)」を経てトンカツとして形成され、また「おいしいトンカツ」になるためには「バター液とパン粉」もよいものでないといけないのだと思いました。「豚肉 (素因) の癖」はバター液とパン粉と環境としての油次第なのです。

「サクサクの衣目指して また潜る」

また潜るというのはもう一度バター液 (卵と小麦粉を溶いたもの) につけるという意味です。トンカツは2度バター液→パン粉を繰り返すとサクサクになると聞いたことがあるので、自分も、さらに知識を広げるため、さらに基礎を振り返って強化し、そこを基盤に知識の幅を広げていきたいと考えています。川柳は、自分から、さらにおいしいトンカツを目指すという決意です。

「読み聞かせ 母の膝と声に包まれて」

私は抱っこされていないと眠れない子でした。布団に寝かせると起きてしまい大変だったそうです。乳児期～3歳の人格の基礎が出来上がるころ、私は絵本を母に読んでもらうのが好きでした。今でもそのときの嬉しさは忘れられません。トンカツに喩えると、抱っこされていないと眠れないという豚肉 (素因) に、抱いて寝かせたり、膝に抱いて読み聞かせをしてくれたところが卵や小麦粉 (アタッチメント) になったのだと気づきました。大学生になり、さらに

パン粉 (教育) をまとい、いい温度の油 (環境) で仕上がっていきたいです。

「持ち前の 気質に合わせた アタッチメント」

私は誕生時は、オムツがパンパンになってもお腹が空いても泣かない子でした。そのせいか自分の思いをあまり言わない子でした。幼稚園に入園してから先生と家族の支えがあり、先生が友達同士の間に仲立ちを繰り返してくれたことで少しずつ思った事を言えるようになったそうです。だから、生まれ持った素因を変える事は出来ないけれど、周りの家族や保育者は、子どもの気質は様々だということを理解して、その子どもに合ったアタッチメントを形成し、援助をしていくことが大切だということが、トンカツ理論からわかりました。

「卵と小麦 どんな自分も 大丈夫」

豚肉の周りにバター液 (卵や小麦粉を溶いたもの) をまどわせないとパン粉が付かず、サクサクの美味しいトンカツが完成しないように、子どもにも生まれ持った素因の上から保護者や保育者などの大人からのアタッチメントが大切だということを、トンカツ理論から理解できました。トンカツ理論を知って、幼児期の自分を思い返してみました。幼児期の私は、内気で気を使ってばかりでした。しかし、保育所の先生や親が、どんな自分でも受け入れてくれるという安心感があったからこそ、自分の意見も言える今の自分になれたのだと分かりました。自分自身の経験から、親のアタッチメントも保育者のアタッチメントも、とても大切なものだと思います。

保育者によるアタッチメント

胎児期を経て、出産直後から形成される母親の匂いや母乳の授乳などによる母子のつながりは母子間にしか形成されないアタッチメントです。また、子どもが病気の時には眠らずに看病し、できることなら自分が身代わりになってその病気を引き受けたいといった、「我が子の命は自分の命よりも大切だ」という母子間に形成

されるアタッチメントを保育者が同じように形成することは困難です。しかし、現代社会の構造は、母親が、子どもを抱いたり育てたりするための、我が子を愛しむ手の役割だけを担っている、母親の一人の人間としての尊厳を保つことも、経済を回すこともできないのが現状です。

保育所保育におけるアタッチメント形成について学生との対話から生まれた「トンカツ理論」。これを用いたアタッチメントの説明を聞いた学生のコメントを読むと、保育所保育におけるアタッチメント形成とは、母親にしかできないアタッチメントを補うばかりではないことが分かります。

アタッチメントは、「自分と他人」が区別できたり、「さっきと今」という時間の流れを不快-快の落差から知っていったりするのためにも欠かせないものです。また、不快になるかもしれない目の前のものに、興味関心を持って一歩近づき、手を伸ばすことができるのも、アタッチメントが形成されていてこそです。一人一人の子どもが、自分は守られていると感じられる環境におかれ、心の支えになる人（保育者）が

いるので大丈夫と信じられ、子どもが主体的にアクションを起こす姿こそが、保育者によるアタッチメントが形成された証拠となります。

アタッチメントとは、トンカツがパン粉をしっかりとまぶせるようになるための、バター液のようなもの。素材そのものの特性を活かせるよう、卵と小麦粉を足したり引いたり、時には水を足したり、入念に捏ねたり。その子の素因を生かせるように、工夫することを楽しみながら、ほどよく、丁寧に包み込みましょう。

〈引用・参考文献〉

- 1) 厚生労働省（編）. 保育所保育指針解説書. 東京：株式会社フレーベル館, 2008.
- 2) 厚生労働省（編）. 保育所保育指針解説書. 東京：株式会社フレーベル館, 2018.
- 3) 富田和巳：性格の成り立ち. 小児心身医学の臨床. 東京：診断と治療社, 2003.
- 4) 富田和巳：子どもの心身を蝕む社会環境 No. 2. 東京：母子保健協会. ふたば, 2004：68 (https://jp.glico.com/boshi/futaba/no68/con01_04.htm)